

特集：地理教育の現場から

高校地理教育の変化と課題

菊池 美千世

I はじめに

「ここは 40 年に 1 度の職場だから。」

これは、私が大和田先生の後任として昭和 60 (1985) 年 4 月にお茶の水女子大学附属高等学校の社会科の教員として採用された時に、地理学科の先生が仰った言葉である。当時、20 代半ばの私は漠然と、「私が定年まで勤めあげれば 35 年だから、確かに 40 年に 1 度かも…」などと思っていたが、あれから早 24 年。いつの間にか、四半世紀近い年月が経過している。(定年延長などということになれば、文字通り 40 年になってしまいそうなこの頃である。)

転勤のない職場故、この間、定点観測のように生徒や学校が変化するのを感じながら過ごして来た。その中で、特に地理の授業を通して気付いたこと・感じたこと、そこから見える地理教育の課題などについて述べてみたい。観察対象がかなり限定されているため、世の中全体の変化と比べると、変化の幅が小さかったり、特定の部分だけ突出していたり、変化の方向性がずれていたりする可能性があることはご承知おき願いたい。

II 高校地理教育の変化と課題

この随想を記すに際し、附属高校 24 年間の第 3 学年における地理選択者数の推移を、改めて調べてみた。ちなみに附属高等学校は伝統的に社会

と理科の全科目を学校必修として 1・2 年で全員に履修させ、3 年では興味・関心および進路に応じてそれぞれ 2～3 科目を選択できるようにカリキュラムを組んでいる。

生徒数も 1 学級 45 人から 40 人へと変化したが、地理の選択者数もこの間に大きく変動した。最多の年は 3 年生の 4 割以上に相当する 56 人が履修していたが、近年は残念ながら減少が続き、1 割強の 15 名前後という状況である。そうした変動の理由を私なりに推測してみると、

- ①学習指導要領の変更および大学受験の教科・科目選択方法の変更
- ②生徒の受験・進学先の変化＝地理歴史科から 2 科目必要な大学を志望・受験する生徒の減少
- ③中学の社会科学習内容の減少による苦手意識
- ④生徒の変化に対して授業改善が不十分

などが考えられる。

本校では全科目を学校必修にしているためか、世界史のみが文科省必修とされた影響は少なかった。しかし、社会科が地理歴史科と公民科に分割されたのにもないセンター試験も 6 教科となり、公民の科目を選択する生徒が増加したことは、地理選択者の減少につながったと思われる。

また、いわゆる国立文系難関校の受験には地理歴史科から 2 科目を課されるが、近年は生徒のチャレンジ精神・学力ともに低下傾向にあり、そ

うした大学の受験者が減り、2科目目としての地理を選択する生徒も減少した。(私立文系志望者が地理では受験できない大学・学部が多いため、1科目目の地理歴史科目として地理を選択しない(できない)のはご存知の通りである。)

さらに、平成14年度施行の学習指導要領から中学校社会科の世界に関する学習時間・学習内容が地理的分野・歴史的分野とも大きく減少したことの影響も考えられる。もともと中学校社会科の3分野の中で地理を好きだとする生徒は多くなかったが、高校での学習内容とのギャップが広がったため、苦手意識が強まったように思われる。(これは世界史も同様か地理以上に深刻であり、未履修問題や、世界史必修にも関わらず地歴3科目の中で、世界史のセンター試験受験者数が最も少ないという事態を生じさせている。)

加えて、私自身の加齢により生徒との年齢差が大きくなる中で、生徒の変化に合わせた授業ができていないのではないかという反省もしている。かつては受験には必要ないが、もっと地理を学びたいからと3年時に選択する生徒もいたが、近年はそうした生徒は残念ながらほとんどいない。授業の内容・方法を見直す必要があると思われる。

選択者減少の理由としてあげた上記の4つの中で、高等学校の地理教育において特に重要だと思われるのは、学習指導要領における世界史必修と大学受験科目の問題である。地理歴史科において世界史のみが必修とされ、地理と日本史のいずれかを選択する現行の枠組みは新指導要領においても継続される。地理と日本史の扱いは指導要領上は同等であるが、地理で受験できる私立大学の文系学部が限定されるため、多くの高校で文系進学を希望する生徒は日本史を選択している。学校によっては選択したくとも地理は開講されていないという状況すら生じている。さらに神奈川県などは県として日本史を必修にする動きを進めている。

こうした状況下で、高等学校における地理の開

講率および選択者数は減少し、地理学科卒業生の教員採用にも影響している。地理を専門とする教員の需要が少なくなるとともに、運良く採用された教員も配属先で歴史を担当させられることも多く、そうした現実に対応して自ら歴史の教員としてキャリアを積む方向に転換する例もあると聞く。

私は大学の「地理歴史科教育法」の授業も歴史の教員と分担して非常勤講師として担当しているが、高校での地理履修歴のない学生が年々増加しており、彼女らは「教育法」の授業以前のレベルで立ち往生している。地理を専門とする教員が減少すると、歴史や他の専門分野の教員が地理を担当する機会が増えることになるが、高校でも地理を履修せず、大学でも専門として地理を学んでいない教員が地理の面白さを授業で伝えることはなかなか容易ではなく、高校の地理を取り巻く状況は厳しさを増している。

また、中学校の学習内容や方法が変更された影響も小さくないように思われる。ゆとり教育、生涯学習の流れの中で学び方を学ぶことが重視され、地理的分野では日本も世界も地誌的な内容が大幅に削減された。世界については、近隣の国を含めて二つ又は三つの国を事例として選んで学ぶこととされたため、授業で扱わなかった地域や国に関する知識が不十分であることはもちろんであるが、興味・関心の薄い生徒が増えたように感じられる。授業で扱うのは中国(または東南アジアの一国)、アメリカ合衆国、EUの一国、という中学校が大部分で、アフリカやラテンアメリカなどは、ほとんど生徒の視野に入っていない。視野に入らないものに興味の持ちようがないともいえる。

海外旅行や海外生活経験のある生徒は増加し、各種メディアでは海外の情報が多く報じられ、インターネットを通して自ら情報に接することもできる時代に生徒は生きている。私の高校時代に比べると世界ははるかに身近になったのだが、生徒

の興味・関心は必ずしも外に向かず、自分の身の回りのことにとどまる場合も少なくない。身近になりすぎて珍しさも薄れたのか、学習機会が減ったことが関係しているのか、感覚としてではなく生徒の知識・興味・関心のあり様の実態をきちんと調べてみる必要があるであろう。

III おわりに

世界に関して中学での既習の知識が少なく、個人としても関心が薄い生徒にとって、高等学校の地理の授業で扱う範囲は急に広くなり、授業についていくのが難しいと感じられるようである。前述のように中学段階でも歴史に比べて地理を好きな生徒は少ないため、そうした生徒たちは地理に苦手意識を持ってしまいがちである。加えて、受験科目としての有用性にも劣るため地理の選択者、受験者は減少していく。

一方、世界に関心のある生徒も少なくないので、進学先や就職先として国際関係分野を選ぶ者もいるが、なかなか地理学を志望する生徒を育てられずにいる。変化する生徒と社会に応じた授業を展開することが一教師として目下の課題である。

ところで、知識と興味・関心の関係を量る試みとして、この数年、1年生に世界の国名と位置を覚えさせるようにした所、2年時の世界史の授業で生徒の理解度向上にその成果が現れつつあると聞く。また、中学校の新学習指導要領では世界地誌の学習が復活したので、数年後に高校に入学してくる生徒たちがどのように変化するかが楽しみである。

きくち・みちよ

お茶の水女子大学附属高等学校

30 回生

The Challenges of Geography Education in Senior High School

KIKUCHI Michiyo (Ochanomizu University Senior High School)